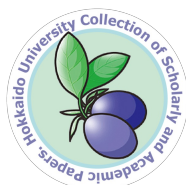




Title	黄海道瑞興県月灘星部落
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	農村社会調査野帳抜書。手書き原稿、 39頁。 資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
Issue Date	1966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77417
Type	manuscript
File Information	B013_0209.pdf



此乃調査部出張者

黄海道 瑞興郡

月 漢里部落

3049

○ 部落神 所品をともかんす

○ 共同労働地獄 (ツレ、ソ、ハ、ミ、フ、チ、ウ)

諸般の物

○ 結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

結婚の儀 婿方側行

672

共同労働組合

○ツレは地帯にはない。海岸地帯の労働地

帯にはワレ所ある。此の労働地帯には故に

甘一牛やもない。盛夏の次の洗脚場の如きもの

もない。労働のところが夏に多い。労働の

多い。田舎のところが夏に多い。労働の

に相当する。労働のところが夏に多い。労働の

やかな。労働のところが夏に多い。労働の

ある。労働のところが夏に多い。労働の

の労働には村中休息して酒宴をけり。労働の

地
 合
 以
 通
 才
 事
 心
 天
 7
 2
 居
 人
 。

ま、畿道安城地方

では昔、凶時に金

や物や、有力で

贈り物を、する

を、フキユーと云ふ。

安城附の意、いふ。

か、ん、と、記し、お

や、。僧、ん、や、寺

に、お、し、し、し、フキユー

と、云、ふ、語、を、用、い、る。

金、北、金、州、地、方、に、い、る。

金、代、で、有力、や、財、物

を、給、付、す、る、事、を

コ、ゲ、コ、と、云、ふ。

コ、ゲ、コ、と、云、ふ、事、は、こ、に、い、な、い。

コ、ウ、と、は、無、償、銀、花、筋、の、意、い、ふ、事、。

コ、チ、コ、ウ、は、

国、ノ、宗、の、為、に、し、や、す、は、世、に、有、る、宗、の、為、に、し、

や、。コ、チ、コ、ウ、の、規、模、は、極、小、い、ふ、事、。

新、落、河、の、有力、者、が、宗、を、建、て、し、時、々、い、は、新、落、河、に、依、り、

チ、コ、ウ、す、。その、時、に、は、隨、分、盛、大、に、酒、肴、を、せ、

し、。新、落、河、す、。知、し、コ、チ、コ、ウ、の、盛、大、に、規、模、は、

新、落、河、の、地、區、い、ふ、事、。他、即、ち、新、落、河、の、者、が、し、加、は、つ、て、

賦、役、は、官、令、に、よ、り、有力、者、を、依、り、給、付、す、る、事、。

(表) 宋の爲に近隣致れぬコナウを行め場合

はよくある。コナウは漢字では孝底と書く

のてあらうと康成氏の説いず。底は元の意

元は情に通ずと云ふのであす。

日 結婚式の時の接吻

結婚式の時には新郎の人には誰のあふるは皆

手付いにあふ。皆泊りてあつて二三日あ

か。日夜となく甲斐の準備をする。女はを

私の準備。多かり靴を供ふ。栗の皮もおく

のも時了と、紅事いふ。ピシ、トクを
 みに、炭あて、庭に作す。手帳に、来々、
 を、居、ス、う、あ、ん、り、す。わ、い、北、人、は、余、が、に、集
 ま、よ。鶴、も、何、所、か、新、さ、水、葉、酒、も、作、こ、水、よ。
 却、後、外、の、名、は、合、ない。

七才以後になつてかゝつてゐた。結婚して

年向位は新婦は強ひ一歩も戸外に出る事はな

かつた。

低く

昔は身や財力の豊かな家祝、結婚年齢は

かつた。當時に於いては一姫常民忠実では

男は二十才前に結婚した。然し親類の家では

二十才を越して居た。故に一姫に兩現では男

かやうな年齢低いか、常民では男かやうな

年齢が高いのか一姫ではある。

十五才の時結婚して當時十九才の妻を思へ

岳
 後
 前
 に
 用
 子
 と
 即
 子
 供
 大
 年
 く
 産
 子
 二
 置
 子

年斯曰

ル
ハ
ヲ
ニ
テ
。

以
上
の
活
字
考
へ
と
郭
錫
の
扱
方
と
出
版
の
経
緯

は十段年、
結婚年、
養女上界、
レ始、
乙、
吃、
一、
時、
虫。

度數
 五葉
 緣乃
 低
 下
 し
 五
 12
 相
 違
 有
 い
 。
 五
 小
 心
 其

徳(四)之し上車に茶子梅に花つゝから又来る

あゝ
に
上野が
の
あ
う
う

此レ
是の
結
作爲
銀の
同
紛か
い
又
低下
す
下
ある

530

無
 十
 年
 十
 年
 始
 年
 年
 上
 界
 し
 始
 め
 る

と
し
ゐ
は
ゑ
海
に
工
う
は
紀
す
の
て
は
な
く

際、この年を逃がして変遷して来るといふは
 り、破れは縫ひに現れ、その小ぬ。又
 全体的に云へば、結婚年齢の上昇は、つと前か
 らといふ。然し最近に於ては、徴兵制の影響
 により、結婚年齢の低下は、二三年中よ
 りや、破れに現れ、その小ぬ。又

○喪章

親が死して服喪中に子を産む事は、別に

罪にはなからず、其子は喪章を披し、兩週

階階にはききつて居る。然し常服に失つては

全く同じでたからず。然し悉く旧年儀もあ

かり兩週階階に於いては、嚴格な道徳は銘水

喪章も同様にす。親の事はたからず、たゞあうう

〇現在に於いては喪章を執り、故に考へる

は念知有し、て居る。此四月には墓墓に親、

て人たし念知活し、に、同か否い。

〇 雨 婚

前妻が死すれば其喪中に縁造かある。

特に金持ちの子もない持家場合には前妻が

死して同じく後妻を迎へる。昔から妻を

亡くした男には古い雨婚をすゝめ考へられ

一般的であつた。

女子が夫を亡くした場合には昔は金持ち

雨婚し方々のか一般の連なりであつた。現在

では雨婚階級には、夫の死後少くとも二三

年間は雨婚しない。昔は二十才の未亡人で

雨婚はしちかゝる。今あゝ凡そ三十年はかゝ
 前かゝ女^子も雨婚^す。事を當^らぬと之も極^にな
 っ^てる。

抑^へ締^めに於^けは過^ぎる人の増加^の率^{より}抑^へ著^し
 二倍^をトす。場合、女子雨婚^の概^況の變化^は先
 令^に序^を入^る。可^きなりと云^はれ^る。

香山洞を渡りて
修験道の
跡をたづね
か

（巻四）
○人工制限の習俗

性胎や穀の習俗と云々
移山の法などない

○不義のふを穀可事なりと云々
此の四では穀十年

未あつた事はない。多量は貧困を以て困つた

事ではある。然るにこれ以上考へる事はない。

〇 双生児に可なり方

双生児か生れし時に芽出ぬいと可なり

片〇 一人を先童と云ひ一人を後童と云ふ。

双生児か生れし所はこゝに在り余り多く有

〇 近き人か先童双生児を生んる〇 双生児は

何かに何れに同じと云ふ用ゐる事になつて居

〇 結婚式も同じ日に知れ可なりと云ふは

〇

○母乳

乳がよく出る場合には三神に祈る者があ

る。乳が止まる場合には、他の婦人の乳を貰いに

廻り請ふ事はない。近所に余った乳を貰って

片の人は、片の人は双方の新登り方にもその乳を貰

いのがせよ。

母乳の代用として、はアイスクリーム（重湯お粥）で

あふ。乳又は粟を原料とする。乳の代用とし

てはこれだけあふ。乳がよく出る食物として

は専ら昆布（若めの意）あり。肉と昔に醬油で

のあ
汁にしゝ食ふ。菓は余り用いぬ。産婦は

産後一般に一週間は安静す。

○乳幼児の疾病手当

昔は乳をすう乳幼児の死は多かつた。昔

は乳幼児の病氣に甚しきすす様を常は念ふ

く、全く自然にまかれり片ん。故に五才位

では人同の數に入れぬ物な凡いあつた。乳

在では全か。若し直接に病氣に付、た

若し病の證明書を甚しき行く。耳や目の病氣

也 昔 かゝ 大 抵 自 然 出 ず か し て 来 乙。
 正 に 終 へ
 二 祈 禱 し て 世 々 永 事 は よ く 耳 』。

○ 出来祝

お出来様一筆子は何の祝もない。但し厄年に

生かぬ者丈には百日目厄抜いをしてやよ。

それにはヤクサルポリ(百厄抜い)であらう。近頃

かゝ順次百戸の家を廻つて餅の材料を貰ふ。
(おしづ)

大概姑が廻す。それで色々の新穀を貰ふ餅

を作る、巫女を呼んで成る午後八時頃から

厄抜いの抜いをやつて貰ふ。その時には近頃

の人お足物に赤いサリツとほおほぬ。サリツはクツとほお
(おしづ)

所いんは、子供等には金はいふ事になつ

○藝田妾

嫁して三子無り小は去り法は宗門に通用

す。事は弦とない。藝田の事は地位と財力に

よ。その情が果つて居る。上流の両班には平

く娯樂の爲に妾を置く。故に道徳的には甚だ

はよくない事と見做す。小は居る。宗門相續の

新婦はは兩班親類を求め、下流親類を得て

其小を得たりとす。五十年吟あやいは、麻

子は婦子に比し比較にたう。以親身分が下であ

る。乙女、上流には妾媵は宗門相續には用い

子、善くを求めん。故に所望は子ありは
 相違ひありす。若し子ありは。昔は妾の
 子には宋智相續の積物はなかつた。然し中略
 以下、宋智は妾に子ありは、財力ありは
 妾を豊に相違ひの積物の有無に拘りず、妾の子
 を得て宋をつかした。然し四十年はかり前か
 り庶おしは流に相違ひある所にたつたか。階
 級による蓄妾の階級もつたは累つて片よ。今
 は妾を豊くのは強て習う宋の力を他に強よ。為
 たら云つてよい。娼妓の余力ある事と他は所

P.

あ
ろ
ろ
あ
ろ

○婦人の信仰

婦人が家に祀る神には、三神、オービヤン

、土地神、ソング、七尾がみ。山などに

はあむさんの神があつた。男が祀るのは祖先

の祭と府忍の祭であつた。

三神は内房の一隅に祀る。飯三杯、わさび茶

碗に入し、その上に湯(湯は布をふくた汁)を三杯供

へた。これは子供が生れた三日目に参行する。

いふ。新よりはお婆さん(姑)といふ。産婦

自身は参り起さうかないから、産婦は起さう

オ ー ビ ヤ ン は 各 戸 に 祀 つ て 居 る か ら 二 十 は	年 々 。僧 が 時 々 其 地 鉢 に 来 る 。	、か ら 二 足 位 の 鑪 香 に 行 く 。勿 論 日 毎 に	行 つ て 凡 經 を 讀 す 。事 々 々 々 。お 寺 は 二	得 る い ふ は 孝 に 行 つ て 佛 か ら に 祈 る 。寺 に	子 を 得 る い ふ に 三 神 に 祈 る 事 は な い 。子 を	か 祈 る 。	時 は 娘 に 行 め し 、婦 に 行 め 。然 し も も し に 娘	を し て 祈 る に し 右 の 形 式 に 祈 る 。其 の	か ら 高 き 時 に 。乳 か ら ぬ 時 や 乳 也 や 病 を
---	--	--	--	---	---	------------------	--	---	--

豊作、宋の都の爲の仁印對衆へある。わい
 い響に米を入れて祀り。二斗も祀りの供なり
 ぬりある。オー、ヒヤン、は、葉へ、伝つてわい、な、宋の
 屋松の形をしへ片。



土地神はあり、代土の所有名が祀つて片。さ
 ぬ祀りのは、ぬい、ある。葉て、かくし、て、おく、伝の
 わい、な、響に、米を、入、れ、て、祈り。土地神の神で

てゐる。

ソングエは宋の燕成の時に祀る。その後宋

の棟に玄のまゝ、紙をふいて祀る。祀るの

はせゐる。

七日は厨房の一隅に餅か飯かと清い水を供

へて祀る。子を得た婦人が自身に祀るの如

く一盃の酒を清い水は井戸の水である。子を得

たはるゝに巫女に頼む事はなく。

然し子か生れなると、その子か丈夫と言つた

に巫女に問ひてその言に従つてどこかの山の

との木の間にその子を置いた事がある。ゆえに
 船の子の場合はいはない。その木は巫女と子
 の母が知つて居た。而して巫女は一
 人だけ。然し、巫女の祭具は全部供出して、水
 を置いた。

子を産み出した新乳の力に、いれきし
 (水) (P. キン) 産女

即ち薬水の鬼神に行つておかしな事がある。此
 いれきしに新乳の子持ちの力と、いれきし。

南緯は産婦に
は精白糸はあな
いと足りなすよ。

○産屋の恐れや。食物と動作

情土脈にっいゝ考へる場合かないものに産屋の

恐れや。食物にっいゝも知らるゝ片はあつた

のはなつ。

五ヶ月以上の産婦は機を織らな、産屋の

取入れかゝるゝあつた。高いところには手をあげ

る事もよく恐れかゝるゝあつた。片はあつた。

この辺には昔から女も耕作にあつた。やうな

かゝるものは、田の仕事を牛で犁を使ふ作業の

やうな。アマシ。アマシ。女もあつた。田力女はあつた。

アマシのうそをいふはソンバ又いふとあつた。秋の漬物には女も
アマシをいふ。産屋は男のアマシであつた。市場に女も

○婦人の喫煙酒

四十才以上の婦人、未成人になつて居る者

は、飲酒しても世人はとかめない （婦人） 煙草も同じ

である。四十以下は飲酒したり喫煙する者は

遊女位である。四五十才の婦人、煙草を常用

して居る者は一部煙草に一人か二人かはあ

る。 （余り） 一般に女子は煙草を嗜みない

のと云つて居る。

〇分家と分居

二三男は昔は結婚して、さう分家して分居
 したので、はなかい。分家して、うちは二丁オを過す
 と、あうであう。長男ニ、長男の夫婦、あう、あうの
 銀、か同居して居る。家、やさしい家、は、困る
 片。やさしい家、は、長男夫婦は、父母の夫婦と
 同居して居る。分地は、財産、か、なう、人、には、何、済
 ぬ、あう、か、うた。財産、か、あう、家、は、山、大、体、長、男、か
 金、新、當、つ、て、居、る。新、居、の、家、は、又、は、親、か、建、て、
 や、う、ん。貧、しい、家、は、二、三、男、の、夫、婦、の、為、に、
 (新)

取の宋の一部を借りてやつた。貧しい宋の二
 三男は分宋してとりは、他の宋の土地をわ作
 すよ。^{生宋}父の田畑をわ作す。それは豊裕な宋の
 二玉男である。その時、^生宋にわ作料を
 す。一般にわ作料は半に、あるは生宋に預
 る。わ作料は幾多他、安い。分宋當時わ作
 であつて、五十倍までは自作になつたもの
 多い。

○食生活

主要食物は粟、甘藷、黍、

绿豆

大豆、小麦、

小麦、粟、宇麻呂、

甘藷、

クワツトク

主食物は粟と大豆、餅、小麦、王粲、黍、

粟、黍、小麦、大豆、

しは、小麦、黍、小麦、大豆、

やうどん、甘藷

は、小麦、白菜と大根、

マ

※や、小麦、油、白、

小麦、小麦、小麦、小麦、

小麦、小麦、小麦、小麦、

小麦、小麦、小麦、小麦、

小麦、小麦、小麦、小麦、

小麦、小麦、小麦、小麦、

ナ	ハ	ル	(葉と用ゐ)	、	ネ	ン	イ	(葉と根と用ゐ)	、	タ	ン
ネ	(根)	、	セ	リ	(葉)	、	ト	ラ	ナ	(根)	、
ス	ク	(葉)	、	ト	トリ	の	葉	(ハクニ作つゝ食ゐ)	、	ナ	(根)
葉とあ											
ヨ											
朱	玉	饅	と	ハ	ク	ハ	代	用	食	と	シ
多	量	に	作	ヨ							
菓	め	と	シ	ハ	饅	か	キ	ヨ			
昔	世	ハ	大	根	宋	ニ	ハ	作			
た	か	夢	通	以	下	の	根	宋	ニ	ハ	作
つ	ク	ア	カ	ツ							
知	し	近	時	葉	根	に	ナ	ツ			
時	葉	根	に	ハ	、	各	戸	近			
月	喰	に	一	回	ハ	作	ツ				
ク	ア	ス									
料	ハ	キ	ヒ	ア	ヨ						

B 5 刊

〇、
 大抵毎年一回としかかへる。ナナキは
 品も上質で、アソでうまにフタ、モンソクは
 料理の宗に用ゐる。富んで宗にはモンソクの上
 にナナキを納めてある。
 寝具は薄い蒲団いす。敷フutonは用ゐる
 。寝衣なし。服類なし。はこの辺はナナキか
 かい。市況も州中よりある。衣類は白装、枕
 枕のキカイも自製である。竹かたひかいオリ
 大購入す。とある。